

2022年1月16日 新年礼拝

説教題「若き日のイエス」ルカ 2 章 41～52 節

主任牧師 加藤 誠

「すると、イエスは言われた。『どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか』(ルカ 2 章 49 節)

主イエスは約 30 歳で公に宣教活動を始めていますが、それまでは両親の村、ガリラヤのナザレで育ちました。マルコ福音書 6 章によると、弟が四人、妹が二人以上いたようですから、少なくとも七人兄弟の長男として育ち、成人した後は、父ヨセフの仕事を継いでナザレの村で大工をして一家を支えていたようです。

もう一つ、貴重な話として残っているのが、今朝ご一緒に読んだルカ 2 章の家族みんなでエルサレム神殿に出かけた時のエピソードです。わたしはこの話をずっと、ヨセフとマリア、そして息子のイエスの三人家族の姿を勝手に思い描いてきたのですが、考えてみると、主イエスはこの時 12 歳ですから、その下の六人の弟や妹たちもみんな一緒だったはずです。ナザレからエルサレムの都まで直線距離で 120 キロ。通常、村ごとに巡礼団をつくって出かけたようですが、その場合、女たちと子どもが列の前の方、男たちは列の後ろの方にかたまって旅をしたようです。ユダヤでは男は 13 歳、女は 12 歳が成人年齢であり、男の場合、12 歳になると一年間はおとなになる準備教育として聖書朗読の仕方などを教わったと言います。ということは、エルサレムからの帰り道、マリアは息子のイエスがもう 12 歳なので、後ろの男たちの列に父親のヨセフと一緒にいるのだろうと思い、ヨセフはイエスがまだ 12 歳なので、母親のマリアと一緒に列の前の方にいるのだろうと思っていた。ところが一日目の夜、家族として合流してみると「あれっ、イエスがいないぞ。どこだ？」という話になったのでしょうか。

この巡礼の期間というのは、エルサレム神殿内は各地からの巡礼者たちでごった返し、その庭では律法学者たちが巡礼者たちの質問に答える青空教室があちこちに生まれていたというので、両親が息子を捜して神殿に戻った時も、その青空教室の中に、律法学者たちの真ん中に座って話を聞いて質問をしている息子イエスを見つけのでしょう。母マリアが「どうしてこんなことをしてくれたのです。ごらんない、お父さんもわたしも心配して捜していたのです」と叱ると、主イエスは「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを知らなかったのですか」と答えたのです。しかしマリアとヨセフも、「神さま」のことをいきなり「わたしの父」と言い出した息子に、「はっ、いったい、この子は何を言い出すんだ？」と大変驚いて、その言っている意味が分からなかったのです。先ほども言いましたように、12 歳というのは、いよいよ来年 13 歳になると、一人前のユダヤの大人として責任ある行動が求められるようになる時です。その時に、主イエスは神さまを「わたしの父」と呼び始めた。これがこのお話の大切なポイントになります。

そして実は、今回調べてみると英語のキングスジェームズ訳ではこの主イエスの言葉が、「わたしが、わたしの父のためにやるべきことに従事していると思わなかったのですか」となっていることを知りました。確かにギリシャ語の原文では「家」という単語は使われておらず、「わたしの父の仕事」(my Father's business)という言葉が使われています。つまり主イエスは「父の家」という「空間」を意識していたというよりも、「わたしの父のためにやるべきこと」という、神さまからいただいた「召命」を意識していたと理解することができるようです。「召命」。「神さまのためにすべきこと」、「わたしに求められている仕事、託されている責任はなんだろうか？」ということ、この時 12 歳になった主イエスは深く意識するようになった。さて私たちの場合はどうでしょうか。神さまからいただいたこの一年。「わたしはこんなことをしたいのです！だから神さま助けてください」という、「わたしが主役／神さまは助け手」と考えていくのか。それとも「神さま、あなたがわたしに望んでおられるのはどのような働きですか？わたしは何をもって神さまのお手伝いをするべきでしょうか？」と、「神さまが主役／そこに仕えていくわたし」で考えていくのか。そのことが深く問われていることを、この 12 歳の主イエスの言葉に教えられます。

またこの時、主イエスが神殿で律法学者たちの前に座り、その話を聞き、質問していた姿にも教えられる思いがします。これは聖書を学んでいる生徒の姿です。実は「ヤコブの福音書」という外典(新約聖書に正式に認められなかった福音書)では、幼い時から大人たちを論破して、へこませていた「恐るべき神童イエス」の姿が描かれています。「神の子」なのだから、ふつうの人間は最初から太刀打ちできない、そういう描き方です。しかし、ルカ福音書は生徒として先生の話をよく聞き、質問して、聖書を学ぼうとしている少年イエスの姿を描きます。「神の子」である主イエスも最初はずっと生徒として学ばれた。まして「人の子」である私たちは、自分もう聖書を何十年も読んでいるから、神学校で学んだからといって「もう自分にはわかっている」「教わる必要はない…」ではなく、神さまの前に常に謙虚に学び続ける姿勢が求められているのではないのでしょうか。

またもう一つ、この箇所から示されるのは母マリアの姿です。51 節「母はこれらのことをすべて心に留めていた」。実はルカ福音書の 1 章と 2 章には、母マリアが天使のお告げに戸惑い、驚き、また羊飼いたちの来訪に驚きながらも、それらのことを「すべて心に納めて、思い巡らしていた」(1:29、2:19) 姿が描かれています。私たち人間には、神さまのなさることは「分からない」のです。「えっ、なんですかそれ？」「そんなの無理です！」「ありえません！」。それくらい人間に神さまのことは「分からない」。「だから、知らない／聴かない」ではなく、「だから、心に納めて、思い巡らし続けていく」。神さまは今日も私たちに「あなたにも手伝ってほしいわたしの働きがある！」と語りかけておられます。すぐには理解して応えられなくても、神さまの大切な呼びかけと受けたのなら、それを「大切に心に納めて、考え巡らし続けて」いきたいのです。